

【優秀賞】 あいテレビ賞

「二度とあってはならないこと」 西条市立東予東中学校 2年 神野良太

人権問題についての授業で、映画「橋のない川」を見ました。部落問題がテーマになっていて、百年以上前の話でした。解放令が出てからも差別が続く明治から大正時代に被差別部落に生まれた主人公が、差別を受けながらも強く生きる物語でしたが、私はその内容に衝撃を受けました。ある土地の人たちだけがあからさまに差別されて、生活も大変苦しく、火事になった時ですら、あそこなら燃えても構わないと放っておかれるなんて、信じられませんでした。自分が主人公なら絶対耐えられないようなことが、映画の中では起こっていました。

先生からは、この映画は事実をもとにしたものだと聞きましたが、私には到底信じられず、本当にあった出来事なんだろうかと疑いました。いや、少しはそういったことがあったけど、映画だから大げさに脚色されているのかな、とも思いました。

私はその映画のことが頭から離れず、帰宅して、母に今日思ったことを話しました。すると母は、

「実はね、母さんの実家の方でも、そういうことはあったらしいよ。三十年ほど前のことだけど、私もあなたのひいおばあちゃんから聞いたのよ。」

と言ったのです。

それは、私の曾祖母の時代で、八十年くらい前のことのようにでした。私は興味を持ち、母から詳しく話を聞くことにしました。

当時、曾祖父母は県内のずいぶん山に近い地域で暮らしていて、代々農業をしていました。周辺に家は少なかったそうですが、ある日、もっと山奥の方から数人の人がこちらを訪ねて来たそうです。その人たちは、家の玄関の土間で、いきなりわらじを脱いでひざまずき、

「〇〇（曾祖父母の苗字）さま、どうか仕事をください。お願いします。」

と言うのだそうです。どういうことかと曾祖父が話を聞くと、街に行っても「部落の人たちにあげられる仕事はない。」と言われて差別され、生活に困って、やむを得ず仕事を求めてこのあたりにやって来たとのことでした。

曾祖父は

「ひざまずくのはやめてください。一緒に仕事しましょう。」

と言って、牛の世話などを一緒にしてもらったそうです。来られた人たちは大変喜んでくれたとのことでした。

このように、その当時被差別部落の人は、「部落の人だから」とあからさまに差別を受けていて、でも生きていくために、その差別を飲み込んで、ひざまずいてでも仕事を探していたのです。

これを聞いて、私は思いました。「橋のない川」とおんなじじゃないか……。

なぜ曾祖父母の家の土間でわらじを脱ぐのでしょうか。なぜ曾祖父に「さま」を付け、ひざまずいて仕事を乞うのでしょうか。なぜ街で働けなかったのでしょうか。私は、母の話を聞いて、あの映画の中であった部落差別とは、本当にあったことなんだ、と分かりました。また、それが絶対あってはいけないことだと、自分のことのように腹立たしく感じました。

そして母は話の最後に、
「ひいおばあちゃんの時代と比較すると、部落に対する悪口を言う人は少なくなっていたけど、私がこの話を聞いた時も、まだすべての差別がなくなったわけではなかったのよ。」と言いました。

自分は、部落差別がされているのを見たことはありません。この映画を見ても、こんなことがあるのかと半信半疑でした。しかし、それは、私が知らなかっただけです。授業でも、まだ差別は残っていると分かりました。このような学習をしなければ、知らずに大人になっていたでしょう。この映画を見なければ、母と部落差別についての話をすることもなく、身近なところに似たようなことがあることも聞かずに過ごしていたのではないのでしょうか。

悲惨なことは、知ると自分もつらくなります。しかし、顔を背けて正しいことを知らないままでは、後に変な噂やネットなどで間違った情報を信じてしまうことになるかも知れません。今回、映画「橋のない川」をきっかけとして、曾祖

母の時代に本当にあったことを知ることができました。百年かけて伝わった、このような事実、また、それに対する自分の気持ちを大切に、私は、差別は間違っていると伝えていきたいです。